『赤と黒』の構造（四）

吉　田　　廣

＊ 本稿は「大阪経済法科大学論集」第105号の pp.1-44の続きである。

目　次（ゴチック箇所が今回分）

はじめに
第１章　時間構成
第２章　話法
第３章　空間構成
第４章　視点
第５章　語り手と登場人物
第６章　レトリック
第７章　文章構造
第８章　ふたたび時間構成
第９章　ふたたび話法
第10章　ふたたび空間構成
第11章　ふたたび視点
第12章　ふたたび語り手と登場人物
第13章　ふたたびレトリック
第14章　ふたたび文章構造
おわりに

第12章　ふたたび語り手と登場人物

●　前章からの梗概

過って花瓶を壊した翌日、ジュリヤンはラ・モール侯爵とともに、あるサロンに出かける。そこでは外国軍進駐を要請する方法についての政治的密議が行われ、ジュリヤンはその書記を命じられる。侯爵とともにそこを出たのは翌朝３時であったが、ジュリヤンは、自分の速記をもとに侯爵が書き上げた密書を暗記してしまうと、その日の

内に侯爵の命を受けてドイツ・マインツの公爵の許に赴く。政治的使命を帯びたその旅行中に知人のロシア貴族と偶然に邂逅し、その貴族から、マチルドの愛を決定的に勝ち得るための手段を教わる。それは、別の婦人に接近して、その婦人に恋文を毎日書き続ける一方で、マチルドに対しては、彼女を深く知る以前の態度で臨むという策であった。そのマチルドは、ジュリヤンの半月の旅行中に、ラ・モール家と親交のあるクロワズノワ公爵との縁談に気持が傾いていたが、帰館したジュリヤンの姿を見ると、忽ちジュリヤンに心が惹きつけられる。その恋心は、ロシア人に教えられたとおりにジュリヤンが行動するにつれて、熱を帯びてくるようになり、ジュリヤンの帰館から１月経ったある日、マチルドは我知らずジュリヤンに縋りつくまでになる。しかし、ジュリヤンは努めて冷静さを固持し続けようとする。以下の箇所は、その翌朝の２人の遣り取りから始まっている。

● **テクスト**（下巻330頁17行目～333頁16行目）

あくる日、朝の八時にはマチルドが図書室へ来るだろうということはわかっていた。彼は九時にようやく姿をあらわした。恋しさでじっとしていられないほどだったが、理性で心を抑えた。おそらく片時といえども、こう自分にくり返さないことはなかったであろう。《あの女にいつも、このひとはあたしを愛しているかしら？　という大きな疑問をいだかせておくこと。あの女はりっぱな身分だし、だれからもちやほやされているので、少々自信をもちすぎている》

マチルドは、蒼ざめた顔をして、おとなしく、長椅子に腰をおろしていたが、身動きひとつできないように見えた。ジュリヤンに手をさしのべて、

「ほんとうに、あなたのご機嫌をそこねてしまいましたわね。怒っていらっしゃるのでしょう？……」

ジュリヤンは、これほど素直な調子で出られるとは思っていなかった。もうすこしで、本心をあらわしそうになった。

「保証がほしいとおっしゃるのね」しばらく待っても、ジュリヤン

がなにもいい出さないので、マチルドがそういった。「ごもっともですわ。あたしを連れ出してください。ロンドンへ行きましょう。……あたしの一生は台なしになるでしょうし、操を汚すことにはなりますけれど……」マチルドは、やっと勇気を出して、ジュリヤンから手をひっこめ、その手で目を隠した。慎みと、女らしい恥らいとが、すっかりマチルドの心に戻ってきたのだ……「ええ、どうぞ、あたしの操を汚してちょうだい」溜息といっしょに、「それもひとつの保証ですわ」

《昨日おれはしあわせだった。それもおれが自分を甘やかさない勇気をもったおかげなのだ》しばらく黙っていたが、感情を抑えつける力を取り戻すと、ジュリヤンは冷やかにいった。

「あなたの言葉どおりに、いったんロンドンへ出奔し、あなたの操が汚れてしまったら、まだわたしを愛してくださると、だれが保証できますか？　郵便馬車に乗ったとたんに、わたしと顔を合わせるのがいやにならないと、だれが保証できますか？　わたしは、人でなしではありません。あなたを世間に出られなくしてしまえば、わたしの不幸がひとつますだけです。邪魔になるのは、世間でのあなたの地位ではなく、お気の毒ですが、あなたの性格なのです。いったい、一週間でも、続けてわたしを愛せると、ご自分に向ってうけ合うことができますか？」

《ほんとに！　たった一週間でいい。一週間おれを愛してくれたら》と、ひそかにジュリヤンはつぶやいた、《おれはうれしさのあまり、気が狂ってしまうだろう。未来がなんだ！　生命がなんだ！　その気になれば、天にものぼるようなこのしあわせが、たった今からでもはじまるのだ。それもおれの気持しだいで》

ジュリヤンが考えこんでいるのを見て、マチルドは、

「じゃあ、あたしは、どうしても、あなたに愛していただく値打がないのね」といいながら、ジュリヤンの手をとった。

ジュリヤンはマチルドを抱きしめてキスした。が、そのとき、義務の鉄の腕が彼の心をつかんだ。《おれがどんなに愛しているかを悟られたら、この女はおれのものではなくなる》腕をふりほどいたときには、早くも男らしい威厳を取り戻していた。

その日と、これに続く数日のあいだ、ジュリヤンは、自分のこの上ない喜びを、巧みにおし隠すことができた。ときには、マチルドを両腕に抱きしめる喜びさえも、きっぱりとあきらめた。

また、幸福のあまり、我を失い、用心深い心の忠告を、まるっきり忘れてしまうこともあった。

庭には、梯子を隠すために作られたすいかずらの棚があった。ジュリヤンはよく立ち寄って、遠くからマチルドの窓の鎧戸を眺めては、女の心変りに泣いたものだった。並はずれて大きなかしの木がそばにあって、その幹がジュリヤンを、口さがない人々の目から隠してくれた。

マチルドと一緒に、ちょうどこの場所を通りがかったとき、ジュリヤンの心には、そのころの不幸が、まざまざとよみがえってきた。むかしの絶望と、今の幸福との開きが、彼のような性格にはあまりにもこたえすぎた。涙があふれ出た。マチルドの手を唇にあてて、ジュリヤンは、「ここでわたしはあなたのことを考えて暮したのです。ここで、わたしはあの鎧戸を眺めていました。それを開けるあなたのこの手が見たいばっかりに、何時間もその幸福な時間を待ち続けていたのです……」

Ⅰ　『読み解く』第12章の概念装置

『読み解く』とは、筆者が2008年10月に大阪経済法科大学出版部から上梓した『「女の一生」を読み解く――フランス小説の徹底分析――』の略記である。まず、その第12章の分析内容を紹介しよう。

登場人物を造形するに当たって、語り手はコントラストを多用する。コントラストは何にも増して読者の胸に訴えかける力が強く、そのぶん登場人物の人となりが効果的に読者の心中に染み渡る。

『読み解く』第12章では、主人公ジャンヌの感傷性を際立たせるために、生活力の化身とも言える女中ロザリが対置されていた。また、元の小作人たちの原始的本能とジャンヌの過度の内面的混乱が対比されていた。さらに、元の召使たちの屈託の無さとジャンヌの危機的心理状態とが引き比べられてもいた。

こうした対照を次々に築く語り手は、明らかに、ジャンヌに完全には寄り添っていない。ジャンヌを登場人物のなかの１人だと見なす冷めた捕らえ方を見失ってはいない。主人公を冷静に造形しようとするこの姿勢は、多くの小説の語り手に共通する。

ところで、小説文では人間社会の一部分が描き出される。『読み解く』第12章のテクストに関して言えば、零落した貴族の寡婦が住み慣れた屋敷をあとにするという事象をめぐって、寡婦本人、女中、女中の息子、元の小作人たち、そして、後始末に残る元の召使たちが、各人各様の思いを抱く微小な社会が描かれていた。小説文が得意とする描写対象は、この微視的社会に他ならない。

小説文に描かれるこの微視的社会では、数々の劇的な要素が滲み出たり、ドラマチックな出来事が起こったりする。寡婦の転居を描く『読み解く』第12章のテクストでの劇的要素は、主人公ジャンヌの危機的心理状態である。周囲の無理解のさなかに置かれた主人公の心理に、われわれ読者は共感をもって寄り添う。それは、主人公に関わる情報を潤沢に有しているからであり、そして、小説の登場人物に対する感情移入が計り知れないほど深いからである。

しかしながら、われわれ読者の関心は、小説文に内在的な要素のみに限局されているわけではない。いま読んでいる小説文の語り手がいかなる人格なのかに、思いを馳せるときもある。

例えば、『女の一生』第12章の断章では、語り手の人物像が３つのイメージから成り立っていた。憂愁詩人のイメージ、悲観主義者のイメージ、楽観主義者のイメージの３つである。

まず、語り手は、ジャンヌと彼女を取り巻く空間に仮託して、憂愁詩人としての自らの一面を露にしていた。次に、すでに述べたように、ジャンヌはそのとき孤独な病的魂を胸に抱いていた。それはジャンヌだけを周囲の人間たちから截然と区別していた。そのようなジャンヌの描写からは語り手の悲観主義者的側面が窺えた。そのようななかで、横溢する生活力を持つ女中ロザリが、ジャンヌの許を決して離れようとしなかった。はたして、この小説の最後に至るまで、ジャンヌとロザリの「二人三脚」のような生活は続いていく。こうしたストーリー・ラインを敷く語り手は、今度は楽観主義者としての自らの側面を垣間見せていた。

ところで、あらゆる文章には趣意がある。小説も文章の１類型であるから、語り手がわれわれ読者に伝えようとしているメッセージが必ずあるはずだ。しかし、文学作品は、ストーリーやレトリックの華々しさの蔭になって、メッセージが容易には見えてこない傾向を有することも否めない。一方、それが見えてくるときには、小説ならではの力強さで、メッセージがわれわれの胸に迫ってくる。これは、小説を読み進める際に、われわれが言わば純粋な心境になることと関連があるのだろう。

『読み解く』第12章のテクストは、悲観的要素と楽観的要素が入り混じった人生の一断面を、詩的な調べに乗せながら提示していた。特に女中ロザリの明朗さが印象的であった。過去がどんなに愛おしくても、生きていかねばならない以上、将来に希望を見出す必要があるという教訓が、そこからは端的に読み取れた。

Ⅱ　テクストの分析

ここの断章には登場人物が２人しか出てこない。ジュリヤンとマチルドの

２人である。こういう状況の常として、叙述は、心理小説のそれに傾斜するものである。本断章では、特にジュリヤンの内面に渦巻く葛藤が、瑞々しく描き出されている。

マチルドのほうは、ここのテクストを通じて、ジュリヤンに傾倒し切っている。だから、ジュリヤンさえその気になれば、彼がマチルドとふたたび情を交わすことは容易なはずである。

けれどもこれまでの経験から、ジュリヤンは、事後にマチルドが自分に食って掛かることを知っている。そうしたときのマチルドがいかに傲岸であるかを経験している。そのために、彼は底深いジレンマに陥っている。「恋しさ」（２行目）と「理性」（３行目）との辛い板挟みになって悶えている。その間の事情は、この断章の随所で触れられているが、それを最も具象的に表しているのは44行目からの次の段落であろう。

> ジュリヤンはマチルドを抱きしめてキスした。が、そのとき、義務の鉄の腕が彼の心をつかんだ。《おれがどんなに愛しているかを悟られたら、この女はおれのものではなくなる》腕をふりほどいたときには、早くも男らしい威厳を取り戻していた。

理性を失うまいとするジュリヤンは、マチルドが２人でロンドンに出奔することを提起した際にも、彼女に訓戒を垂れて、それがいかに理に適わないことかを諄々と説き聞かせる。あたかも過ちを犯しがちな女生徒に教師が説教する風情である。

> 「あなたの言葉どおりに、いったんロンドンへ出奔し、あなたの操が汚れてしまったら、まだわたしを愛してくださると、だれが保証できますか？　郵便馬車に乗ったとたんに、わたしと顔を合わせるのがいやにならないと、だれが保証できますか？　わたしは、人でなしではありません。あなたを世間に出られなくしてしまえば、わたしの不幸がひとつますだけです。邪魔になるのは、世間でのあなたの地位ではなく、お気の毒ですが、あなたの性格なのです。いったい、一週間でも、続けてわたしを愛せると、ご自分に向ってうけ合うことができますか？」

（27～35行目）

見られるように、ジュリヤンとマチルドの双方が、自己の内面に２つの相剋する存在を抱いている。ジュリヤンは、マチルドに恋する自分と、その気持を無理にでも抑えつけようとする自分を蔵している。マチルドは、ジュリヤンを愛しく思う可能性と、それを屈辱的に感じる可能性を心に秘めている。

この断章には彼ら２人しか登場しないが、彼らのそれぞれが、人格に根差したジレンマに苦しんでいる。そのために、２人とも身動きが取れない状況にある。だから、ここの断章には、実際は４人の登場人物が出てきているようなものである。すなわち、理性的なジュリヤン、感性的なジュリヤン、従順なマチルド、高慢なマチルドの４者である。そのために、本テクストからは終始ある種のさざめきが聞こえてくるようにも思われる。２人の人物しか登場していないにも関わらず、４者がそれぞれ自己を強く主張している態である。

こうしたわけなので、われわれ読者が本テクストを読む際にも、そこに高度なドラマチック性を感じ取る。多大な躍動感に触れる心地がする。けだし、小説文の語り手は、登場人物の多寡に関わらず、読者を飽きさせない術を心得ている。この先ストーリーがどのように進展するのかと、われわれに身を乗り出させる技量を持っている。

*

語り手もしくは記述者は、本断章の展開をどのように見ているのだろうか。ジュリヤンとマチルドに対して、どの程度の距離を取っているのか。未完にせよ、小説文を書いたことのある筆者の経験から言えば、鉤括弧で囲まれている直接話法においては、語り手と登場人物との距離はほとんど無に等しい。

「ほんとうに、あなたのご機嫌をそこねてしまいましたわね。怒っていらっしゃるのでしょう？……」（11～12行目）とマチルドが口にするとき、語り手は彼女と一体になってジュリヤンに話しかけている。そこにおいては、マチルドの立場に語り手はほぼ完全に擦り寄っている。

「ここでわたしはあなたのことを考えて暮したのです。ここで、わたしは

あの鎧戸を眺めていました。それを開けるあなたのこの手が見たいばっかりに、何時間もその幸福な時間を待ち続けていたのです……」（62～65行目）とジュリヤンがマチルドに打ち明けるときも、語り手はジュリヤンの心境に密に寄り添っている。この間の事情は読者についても同様であって、読者と語り手は、こうした直接話法において顔を突き合わせる。つまり、読み手と語り手の双方が登場人物の心境に密着する。

ギユメで括られた自由間接話法の場合はどうであろうか。５～７行目にはこうある。

《あの女にいつも、このひとはあたしを愛しているかしら？　という大きな疑問をいだかせておくこと。あの女はりっぱな身分だし、だれからもちやほやされているので、少々自信をもちすぎている》

ここでも、直接話法に関してと同様なことが言えそうだが、大きな相違もある。すなわち、自由間接話法は修辞的性格を強く帯びている。

本稿のはじめの辺りですでに述べたことであるが、現実生活のなかでわれわれが心中で思うことは、あまりにも混沌としており、言葉として明瞭に分節化されてはいない。小説の語り手はそのことを平然と無視して、登場人物の内面を分節化された形で述べる。一般の読者も何の疑問も持たずに、自由間接話法の箇所を読んで、登場人物の心理を理解したつもりになっている。いや、直接話法とは別種の仕方で登場人物と気持を一にする。こうして、語り手の作為が、読者によって自然なものと受け止められる。この点は、小説というジャンルに独特である。

もっとも、同様なことは、地の文についてもしばしば言える。そうしたときには、語り手は正しく自由に登場人物の内面に忍び入る。例えば13～14行目にはこうある。

ジュリヤンは、これほど素直な調子で出られるとは思っていなかった。もうすこしで、本心をあらわしそうになった。

３人称体小説の面白さは、このようなところにある。直接話法、自由間接話法、それら以外の地の文という３つの話法形態を通して、語り手はわれわ

れに個々の登場人物の心理を暴いていく。全知全能の語り手が読者の手を引いて、登場人物の内面世界を旅させる。

ただし、このことは心理を扱う件についてのみ言えることである。本断章を通じて、語り手は心理解剖者としての自らの才能を遺憾なく発揮している。登場人物をジュリヤンとマチルドの２人に絞って、彼らの内面生活を赤裸々に明るみに出している。テーマが若い２人の恋愛関係であるだけに、ここでの語り手はロマンチストになり切っている。われわれ読者の一人ひとりも、ロマンチックな気分に深々と浸る。

*

本断章を通じて、語り手はどのような趣意をわれわれ読者に伝えようとしているのだろうか。ジュリヤンの姿勢を描くことによって、恋愛関係における術数を示そうとしているのか。確かにそうとも言えよう。

家柄の良い高慢な娘を籠絡する術が、ここのテクストでは詳細に説かれている。これが、本断章の直接的なメッセージである。すでに引用した箇所を含む件だが、次の箇所はその間の事情をよく表している。

> ジュリヤンはマチルドを抱きしめてキスした。が、そのとき、義務の鉄の腕が彼の心をつかんだ。《おれがどんなに愛しているかを悟られたら、この女はおれのものではなくなる》腕をふりほどいたときには、早くも男らしい威厳を取り戻していた。
>
> その日と、これに続く数日のあいだ、ジュリヤンは、自分のこの上ない喜びを、巧みにおし隠すことができた。ときには、マチルドを両腕に抱きしめる喜びさえも、きっぱりとあきらめた。
>
> (44～50行目)

けれども、こうしたジュリヤンの行為は、恋愛関係の枠を超えて、克己心の全般にまで拡張解釈することもできよう。目的を果たすために、努めて禁欲的であろうとするジュリヤンの姿勢を前にして、われわれ読者は讃嘆の念を禁じ得ない。困難な状況にあっても、あるいは、そうした状況であればこそ、あくまでも己に打ち克とうとするジュリヤンの克己心が、本断章では鮮

明に描かれている。

だから、語り手は、ここのテクストを通じて、克己心の重要性を読者に訴えていると見なせる。モラリストが垂れる訓戒や訓話とは異なって、小説のストーリーのうえに現れる「生身」の主人公の姿にその重要性が彫琢されているので、読者はそれを違和感なく受け入れられる。

もっと視座を広げて言えば、われわれ自身がいろんな状況に遭遇したときに、かつて読んだ小説の登場人物に思いを馳せることがある。こんな場合には、ジュリヤンであれば、どのように考えてどのように行動するだろうかと自分の心に問うてみたりする。それは、例えば『女の一生』に登場する人物たちについても、同様に言えることである。しかし、『赤と黒』のジュリヤンほどピュアーな若者は稀有である。混じり気のない筆致で造形されたヒーローの人となりを、読者は胸の深いところに刻み込む。それが人生をより良く生きるためであることは、言うまでもない。

Ⅲ　まとめ

大学生の頃に筆者が習ったフランス人の教官は、「読書は再読から始まる」とよく口にしていた。初読は、読書の態を成していないということである。初読においては、小説が提供する様々な情報を処理し切れないということだ。はたして、われわれがある小説を数年の歳月を経たあとで読み返すと、その相貌がずいぶんと異なって現れるのによく驚かされる。

ところが、特に『赤と黒』のような長編小説においては、いくたび読み返しても、細部にまで十分に眼が行き届くことはない。これは『赤と黒』の約半分の長さしかない『女の一生』についても同断である。長編小説全般についても同様に言えることである。そこで、次善の策として、われわれが拙論で行っている断章凝視がある。文庫版で３頁ほどの文章を抜き出して、所与の視座からそれを徹底的に読み込む。その文章を隅々まで検討する。そのようにして、語り手と同じくらいのレベルにまで自己を引き上げる。そうする

と、当該の言説がわれわれ分析者の胸間に浸潤してきて、そこに発現する語り口調や登場人物に自分をほぼ完全に同化できる。そして、その断章の内容と文体が永続的に分析者の記憶に残る。

もっとも、「永続」とは大仰な言葉である。ある言説を断章凝視の立場からいくら分析しても、数年も経てば記憶の輪郭がぼやけてきてしまう。断章も分析文もともに脳裡で薄れてくる。その分析で自分がどのような成果を得たのか判然としなくなる。

それでも、一二度、一定の長さの小説に目を通しただけで、それを読んだ気になるよりは増しだ。不鮮明ながらも、断章凝視によって分析した言説は永く記憶に残る。それは、われわれが決然と「自己投資」をしたからである。所与の３頁に知的精力を注ぎ込んだからである。本章に則して言えば、分析によってわれわれはジュリヤンやマチルド、語り手の人となりを胸中に収めた。２人の姿形や心理、行動を理解して呑み込んだ。こうしたプロセスを踏むと、当該の言説の有り様は、不明瞭になっていきながらも、記憶から完全には雲散霧消することはない。

第13章　ふたたびレトリック

● 前章からの梗概

ジュリヤンとマチルドとのあいだの愛情が蘇り、夜の密会も重ねられるようになると、やがてマチルドは身籠もる。そして、しばらくの期間を置いたのち、彼女は父に自分たちの仲を打ち明ける手紙を認める。それを読んでラ・モール侯爵は憤慨し、ジュリヤンを自室に呼びつけて怒りをぶちまけるが、事情をジュリヤンから聞いたピラール神父は、侯爵に、２人の結婚を正式に認めるほうが妥当であろうとの進言を行う。しかし、娘を公爵夫人にする夢を思い切れない侯爵がなかなか決心できないでいるあいだに、６週間が過ぎてしまう。けれども、癇癪を起こしたマチルドから、ジュリヤンとの挙式を密かに決行する旨の手紙を渡されると、侯爵は、ひとまずジュリヤンが従男爵に叙せられ、軽騎兵中尉に任命されるように取り計らったうえで、自分の最終

的な考えは２週間以内に知らせると娘に返事する。こうして、ジュリヤンは中尉として任地ストラスブールに赴き、そこの連隊でも周囲の尊敬を勝ち得ていく。ところが、10日ほどのちに、「なにもかもおしまいです」とのマチルドの手紙によってパリに呼び戻される。彼の不在中に、侯爵から照会を受けたレーナル夫人が、侯爵への返事のなかで、ジュリヤンを腹黒く罪深い野心的偽善家として描いていた――。下掲の箇所は、ジュリヤンがパリに早朝に舞い戻り、マチルドと辻馬車に乗り込み、侯爵が娘に宛てた置き手紙を読んだ直後の場面からはじまっている。

● テクスト（下巻371頁７行目～374頁４行目）

「レーナル夫人の手紙はどこにある？」と、ジュリヤンは冷やかにきいた。

「ここにありますわ。でもあなたの心の用意ができてからお見せするつもりでしたの」

手紙　5

「信仰と道徳の神聖な掟に背くわけにはまいりませんので、わたくしは、心ならずも、あなたさまがお求めの、つらいつとめをはたすのでございます。けっして間違うことのない神さまの掟に従い、わたくしはいま隣人をそこなわなければなりませんが、それも、いっそう大きな罪を防ぐためなのでございます。いかに苦しいこととは申しながら、義務と考えまして、この苦しみを抑えるべきなのでございましょう。あなたさまはあのかたについて、ありのままに述べよとのお申越しでございますが、あのかたの行状は、不可解なようにも、ときにまた、りっぱなようにさえ見えたことでございましょう。むりもございません。事実の一部分は、隠すなり、偽るなりしたほうがよいかとも考えたのでございます。思慮のあるふるまいという点から申せば、また信仰の上から申しても、そうすべきだったのかもしれません。けれども、お問合せ

のかたの行状は、実際、言葉ではいいつくせないほど、この上なく罪深いものでした。あのかたは貧乏で貪欲でしたから、完璧な偽善の下に隠れ、ひとりの弱い不しあわせな女を誘惑して、地位を作り、出世をしようと計ったのでございます。これもつらいつとめの一部かと存じますが、さらに申しそえますならば、J……さまは、すこしも信仰の心をおもちにならないようでございます。正直なところ、あのひとはある家庭で成功しようと思うと、いつもその家庭でいちばん信用のある婦人を誘惑するという手を使うのだ、とわたくしは考えないではいられません。うわべはいかにも無欲そうでございますし、言葉は小説ふうの文句を使いながら、その陰で、あの方はその家のあるじと財産とを、どうにかして自分の思うままにしてしまおうと、そればかりをひたすら考えているのでございます。あのかたは、去ったあとに、不幸と永遠の悔いとを残すひとなのでございます」云々。

長々と書き連ね、涙で消えかかったこの手紙は、まぎれもなく、レーナル夫人の筆跡だった。のみならず、ふだんよりも、いっそう念を入れて書いてあった。

「ラ・モールさんを責めることはできない」ジュリヤンは読みおえるといった。「おっしゃるとおりだし、慎重な措置だ。どこの父親が、こんな男に、かわいい娘をくれるものか！　さようなら！」

ジュリヤンは辻馬車から飛びおりた。通りのはずれに止っている郵便馬車のほうへ走っていった。もはやマチルドなど眼中にないようだった。残されたマチルドは、二、三歩あとを追いかけた。だが、顔見知りの近所の商人たちが店先へ出てきて、こちらを見ているので、仕方なく、あわてて庭の中に駆け戻った。

ジュリヤンはヴェリエールへ向けて出発したのである。急ぎ旅の途中で、マチルドに手紙を書こうと思ったが、どうしても書けな

かった。手が紙の上に、字の形にならぬ線を描き連ねるばかりだった。

日曜日の朝、ジュリヤンはヴェリエールに着いた。土地の武器商の店にはいると、主人が、このたびはご出世なさったそうでと、しきりにお世辞をいった。土地では評判だったのである。

ジュリヤンはやっとのことで、ピストルを一そろい買いたいのだということを、のみこませた。店の主人は、いわれるままにピストルに弾をこめた。

三つの鐘が鳴っていた。この合図はフランスの田舎の村ではよく知られている。朝の鐘がいろいろ鳴ったあとで、いよいよミサがはじまるという知らせなのである。

ジュリヤンはヴェリエールの新しい教会へはいっていった。聖堂の窓は高く、いずれも真紅の窓かけでおおわれている。ジュリヤンは、レーナル夫人の腰かけの数歩うしろまで来た。夫人は一心にお祈りをしているらしい。あれほど愛してくれた女の姿だ。腕がわなわなとふるえて、しばらくジュリヤンは計画を実行に移せなかった。《おれにはできない》とジュリヤンはつぶやいた。《こんなありさまじゃ、とても撃てない》

このとき、ミサをつとめていた若い神父が、聖体を捧げる合図の鈴を鳴らした。レーナル夫人はうつ向いた。一瞬頭が肩かけのひだですっぽり隠れてしまった。夫人だという気がそれほどしなくなった。ねらって、ピストルのひきがねをひいた。弾はそれた。もう一発撃った。夫人はぱったり倒れた。

Ⅰ　『読み解く』第13章の概念装置

語り手が種々の文彩を用いるのは、強調効果や対照効果、あるいは美的効果を醸し出すためである。これらの効果に魅せられながら、われわれ読者は

小説の言説を辿っていく。

まず、強調効果は、反復法や誇張法、緩叙法によって作り出される。反復法は、同じことや類似することを繰り返し述べるものであり、反復強調の効果によって読者の心を動かす手法である。誇張法は、許容できる範囲内で大袈裟に言い表すことによって、読者が受ける印象を深甚なものにする手法である。緩叙法は、実際よりも控え目に述べることによって、かえって強い意味効果を生む手法である。

例えば、『読み解く』第13章のテクストの最終３段落は、いずれもが、当てもなくパリの街を彷徨するジャンヌの姿を描いていた。明白な反復であり、心身ともに窮地に立っているヒロインの有り様が強調されていた。

次に、小説文に認められる対照（コントラスト）も、読者の関心をストーリー展開に惹きつけておくための重要な力として機能する。コントラストが築かれている箇所ごとに読者は情動を覚え、それが発条となって先を読み進めていこうとする。だから、語り手が対照法を頻繁に駆使するのは、当然な成り行きだと言える。

例えば、すでに触れた『読み解く』第13章のテクストの最終３段落においても、コントラストが生かされていた。１番目の段落では「包みをかかえた人たち」と「馭者」が、２番目の段落では「通りすがりの人」が、３番目の段落では「テーブルについて食事をしている」人々が、それぞれジャンヌと対置されていた。これらの人々は、少なくとも彼女ほど大きな屈託に悩んでいない。独りジャンヌだけが、心身ともに弱り切った状態にある。ここの対照は、ジャンヌの内面と周囲の人々のそれとの深い隔絶に基づいている。このような箇所では、この種のギャップがこれから先いかにして解消されるか否かに読者の注目が集まる。ジャンヌが、これからどのようにして、このコントラストを乗り越えていくのかにわれわれの関心が集中する。

最後に、小説文の美的効果については、美の本質を考慮に入れることが必要である。第一に、美的対象は鑑賞者による改変を拒絶する。第二に、対象が完結しているときに、人はそこに美を感じる。第三に、表現のイメージ性

が豊かであるときに、われわれにはその表現が美しいと感じられる。以上が美の３つの要件である。ストーリー展開の面白さは小説文の成立に必須な要素だが、言語表現上のいろんな美しさが存在することも、薫り高い小説文が成り立つためには不可欠である。

このうちの第一要件を、やはり『読み解く』第13章の断章の最終３段落について考察してみよう。そこには「街路」→「公園」→「料理店の前」という場所に関するバリエーションが認められる。そのぶん単なる反復という生な印象が薄められている。また、ジャンヌの孤独感それ自体の中身についても変化が見て取れる。１番目の段落では、狼狽のあまり足早に歩いて行く彼女が、２番目の段落では、疲れと寒さに襲われる彼女が、最後の段落では、自らの悲痛に対する羞恥心の虜になっている彼女が、それぞれ描かれている。こうしたバリエーションもまた、当該の件の情感豊かな調べを生み出している。その結果として、単なる反復だとの誹りを撥ね除ける文章に仕上がっている。

Ⅱ　テクストの分析

レーナル夫人の告発の書簡には、『赤と黒』をここまで読み進めてきた読者を驚愕させる、次の件が含まれている。

> 正直なところ、あのひとはある家庭で成功しようと思うと、いつもその家庭でいちばん信用のある婦人を誘惑するという手を使うのだ、とわたくしは考えないではいられません。うわべはいかにも無欲そうでございますし、言葉は小説ふうの文句を使いながら、その陰で、あの方はその家のあるじと財産とを、どうにかして自分の思うままにしてしまおうと、そればかりをひたすら考えているのでございます。あのかたは、去ったあとに、不幸と永遠の悔いを残すひとなのでございます。
> （25～32行目）

上巻を読んでしまっているわれわれ読者は、ジュリヤンが無私無欲でレー

ナル夫人を愛したことを知っている。ブザンソンの神学校に行く際にも、学資を提供しようとするレーナル氏やレーナル夫人に対して、ジュリヤンが潔くそれを断ったことを知っている。だから、レーナル夫人の手紙のこの件には反用法が使われていることが窺い知れる。「あの方はその家のあるじと財産とを、どうにかして自分の思うままにしてしまおうと、そればかりをひたすら考えているのでございます」との告発の文言は、ジュリヤンの実際の姿と明らかに異なる内容を含んでいる。そして、内容が全く相違するという点で、ジュリヤンの実像と虚像は逆説的にわれわれの脳裡で重なり合う。ここの文章箇所で反用法的反復法が用いられている所以である。

これに続く「あのかたは、去ったあとに、不幸と永遠の悔いを残すひとなのでございます」は、それとは趣が異なる。本稿第７章のテクストで、レーナル夫人があくまでもジュリヤンを拒もうとしたことは「事実」だからである。だから、この１文はレーナル夫人のいまの心境を彷彿と表している。第７章でジュリヤンを拒み得なかった夫人の姿と、ここの文言は表裏一体の関係にある。だから、ここでは壮大な反復法が打ち立てられている。レーナル夫人の手紙の内容と彼女の過去とが同時に想起される。

反復法の使用例をさらに１つ掬っておこう。39～41行目にはこうある。

> ジュリヤンは辻馬車から飛びおりた。通りのはずれに止っている郵便馬車のほうへ走っていった。もはやマチルドなど眼中にないようだった。

また、44～47行目はこうである。

> ジュリヤンはヴェリエールへ向けて出発したのである。急ぎ旅の途中で、マチルドに手紙を書こうと思ったが、どうしても書けなかった。手が紙の上に、字の形にならぬ線を描き連ねるばかりだった。

ジュリヤンの逆上振りが、「飛びおりる」「走っていった」「マチルドなど眼中にない」「急ぎ旅」といった言葉によって示されている。また、「手が紙の上に、字の形にならぬ線を描き連ねるばかりだった」は、彼の怒りの甚だしさを一層端的に表している。この最後の例では、誇張法も用いられているのではないかと訝られる。逆上のあまりに文字が書けないという経験を、少な

くとも筆者はしたことがない。拙論を読んでいる人のなかでも、これほど怒り心頭に発したことがある人は稀有ではなかろうか。それほどまでに、この例は、至って誇張的である。

また、テクストの末尾で、事情はどうあれ、ジュリヤンがレーナル夫人を背後から狙撃した際に２発の弾を撃ったことも、強調的ないしは誇張的である。最初の１発だけでレーナル夫人が倒れたならば、緊迫感が減殺されてしまったであろう。

*

『赤と黒』のストーリーは、レーナル夫人の告発状をジュリヤンが読んだことを境に急転する。なるほど、「長々と書き連ね、涙で消えかかったこの手紙は、まぎれもなく、レーナル夫人の筆跡だった。のみならず、ふだんよりも、いっそう念を入れて書いてあった」（33～35行目）との言葉から、注意深い読者であれば、この手紙が一種の偽書であることを察知するかもしれない。しかし、ジュリヤンはその気配に見向きもしない。

こうして、レーナル夫人の告発状を契機に『赤と黒』の物語が急転回する。これまでのジュリヤンの刻苦勉励が水泡に帰し、出世への階梯が地に倒れてしまう。このことは、ジュリヤンにとって青天の霹靂であると同時に、彼に感情移入をしてきたわれわれ読者にとっても極めてショッキングな出来事である。もっとも、主人公の希望の道が突然に断たれるという結構は、大いにドラマチックであり、文字通りロマネスクでもある。

『赤と黒』全編での最大のコントラストは、けだし、ここの断章の辺りであろう。主人公が積み上げてきた信用がここで一気に砕かれる。こうした劇的なストーリー展開を語り手は密かに用意しておいた。語り手のあとに続いて歩を進めてきたわれわれは、あたかも語り手によって突き放されるような気分を味わう。語り手を信じ切って安心していた読者は、彼の「背信行為」に直面する。語り手に全幅の信頼を寄せていたわれわれは、語り手のこの行為に驚愕の念を禁じ得ない。

ところで、本断章の筆致ないしは語り振りは、39行目から一変している。

そこからは直接話法が忽然と消えている。そして、行動主義的叙述に文体が変化している。

言うまでもなく、レーナル夫人を危めて復讐をはたすために、ヴェリエールへの「急ぎ旅」（44行目）の途上にジュリヤンがいるからである。もっとも、39～56行目では、彼の殺意がまだそれとは指呼されていない。行動主義的な記述法がそこでは採られている。ジュリヤンの殺意が歴然とするのは57行目からの２つの段落においてである。

「教会」という場所柄とそこでの銃殺行為とは、明白なコントラストを成す。平和と静謐の象徴とも言える教会内部と、そこで行われる蛮行とは、明瞭な対照関係にある。教会の静けさのなかでピストルの発砲音が鳴り響く。これは稀有な出来事である。ここで語り手は、問題の殺害行為のドラマチックな性質を際立たせるために、究極的な対照法に訴えている。

遡って考えれば、武器商の許でのシーンにも、対照法の雄弁な使用例が認められる。

> 日曜日の朝、ジュリヤンはヴェリエールに着いた。土地の武器商の店にはいると、主人が、このたびはご出世なさったそうでと、しきりにお世辞をいった。土地では評判だったのである。
>
> ジュリヤンはやっとのことで、ピストルを一そろい買いたいのだということを、のみこませた。店の主人は、いわれるままにピストルに弾をこめた。
>
> （48～53行目）

ここでは、暗い企図を秘めたジュリヤンの胸中と、武器商のにこやかな接客振りが好対照を成している。あるいは、「店の主人は、いわれるままにピストルに弾をこめた」という言葉に認められる、「出世」したジュリヤンに対する武器商の従順さは、他意のない商人の親切心と、殺意に満ちているジュリヤンの荒々しい心とのコントラストを際立たせている。さらに、「土地では評判だったのである」との簡潔な１文は、ヴェリエールで未だに存続している虚構と、ジュリヤンの名誉が失墜してしまっている実際との対照性を、浮

き彫りにしている。

もっと遡るならば、15～22行目には次の１節がある。

事実の一部分は、隠すなり、偽るなりしたほうがよいかとも考えたのでございます。思慮のあるふるまいという点から申せば、また信仰の上から申しても、そうすべきだったのかもしれません。けれども、お問合せのかたの行状は、実際、言葉ではいいつくせないほど、この上なく罪深いものでした。あのかたは貧乏で貪欲でしたから、完璧な偽善の下に隠れ、ひとりの弱い不しあわせな女を誘惑して、地位を作り、出世しようと計ったのでございます。

ここには信仰心と告発欲との相剋が読み取れる。逆接の接続詞「けれども」が異彩を放っている。レーナル夫人はここで「信仰の上から申しても」と述べつつも、その信仰心が覆るほどにジュリヤンを「敵視」している。または字面からそう受け取られる。この書簡を読んでジュリヤンは逆上するが、それに似た感情にレーナル夫人も捕らえられている。

*

本テクストの全体は、２つのクライマックス（漸増法）によって構造化されている。そういうものとして、ここの件は均整美に富んでいる。

まず、レーナル夫人の手紙は、６～８行目で、比較的静かな口調ではじまっている。

信仰と道徳の神聖な掟に背くわけにはまいりませんので、わたくしは、心ならずも、あなたさまがお求めの、つらいつとめをはたすのでございます。

これとは逆に、手紙の最後は、ジュリヤンに対する夫人の直截的な告発となっている。すでに引用した箇所だが、ここの書簡文の絶頂に当たるので、ふたたび掲げておこう。

正直なところ、あのひとはある家庭で成功しようと思うと、いつもその家庭でいちばん信用のある婦人を誘惑するという手を使うのだ、とわたくしは考えないではいられません。うわべはいかにも無欲そうでござい

ますし、言葉は小説ふうの文句を使いながら、その陰で、あの方はその家のあるじと財産とを、どうにかして自分の思うままにしてしまおうと、そればかりをひたすら考えているのでございます。あのかたは、去ったあとに、不幸と永遠の悔いとを残すひとなのでございます。

（25～32行目）

見られるように、書き出しの抑制的な調子が、書簡のおわり辺りでは激昂したそれへと変化している。

同様に、テクストの後半では、逆上したジュリヤンが復讐のためにレーナル夫人を殺害しようとするが、それがまず行動主義的筆致で語られる。そのあとに、教会の大ミサでのピストルによる殺人未遂というクライマックスが訪れる。

このとき、ミサをつとめていた若い神父が、聖体を捧げる合図の鈴を鳴らした。レーナル夫人はうつ向いた。一瞬頭が肩かけのひだですっぽり隠れてしまった。夫人だという気がそれほどしなくなった。ねらって、ピストルのひきがねをひいた。弾はそれた。もう一度撃った。夫人はぱったり倒れた。

（64～68行目）

このように、本断章の結構は明白な対句に基づいている。それは均整美に富む構造を呈している。大規模な対句なので、われわれ読者の美感は大いに刺戟される。

ところで、ジュリヤンによる発砲劇は比喩のうえに成り立っている。前掲箇所の「夫人だという気がそれほどしなくなった」では、「レーナル夫人の俯かない後ろ姿」と「夫人の俯いた後ろ姿」とが、「レーナル夫人という個人」を共通部分として相対している。レーナル夫人らしくない後者に対してジュリヤンの殺意が頂点に達して、彼はピストルの引き金を引く。したがって、こうした比喩が具現化されなかったならば、ジュリヤンは殺人未遂を犯さなかったはずである。

もっとも、この比喩は特異である。それは、類似性や隣接性へと２つの要

素を収斂していない。２つのイメージを差異性や遠隔性の方向に拡散している。共通部分の「レーナル夫人という個人」が薄れていき、その結果、ジュリヤンはピストルの引き金を引く。

Ⅲ　まとめ

ドラマチックな言説を支えているのは、数多の文彩である。この場合の「ドラマチックな言説」とは、ストーリー展開のみを指してはいない。言説に内在するバランスやテンポ、強弱をも意味している。このような性質は文章に練り込まれているので、読者がそれを捕らえるのは容易ではない。けれども、断章凝視の見地に立てば、自ずと話は別になる。その見地に立つと、興味深い様々な表現技法が剔抉される。

文彩の数は一定しない。Ｔ・トドロフによれば、その数は個々の分析者によって変動する。分析者たちが所与の言説から受ける美感や印象には異同がある。その異同に応じて文彩の数は違ってくる。いわば、文彩の集合は開かれたそれである。

だから、ここの断章をレトリックの観点から分析するに際して、それを分析する人が異なれば、分析結果も一様ではなくなる。いずれにしても、文彩を掬い出す能力は日頃から涵養しておかねばならない。そうしたほうが文章を堪能できる。また、断章を永く脳裡に留め置くことができる。もっとも、どんな読者の記憶も完璧ではない。断章やそこで用いられている文彩の記憶は、われわれの脳裡で風化を免れ得ない。ほとんどの人生経験と同様に、断片化を避けることはできない。

再読や三読の意味は正にそこにある。われわれは、それらによって小説の内容を再確認すると同時に、いままで気づかなかった詳細を見出して吃驚する。例えば、『赤と黒』の再読者や三読者は、ジュリヤンがレーナル夫人を狙ってピストルを発砲した際の彼の心理を、ふたたび鮮やかに脳裡に刻み込む。けれども、これは断章凝視に限ったことである。短編小説にせよ、長編

小説にせよ、それらの全体や章を射程に入れた話ではない。全体や章は、内容を記憶に深く永く留めるには、あまりにも長大すぎる。

第14章　ふたたび文章構造

● 前章からの梗概

レーナル夫人からの誣告の手紙に対する復讐心に燃えたジュリヤンは、ヴェリエールの教会で夫人に発砲したが、収監後に、夫人の生命には別状がなかったと聞かされて後悔の念を抱きはじめ、また、次第に夫人への恋しさが募ってくる。事件の半月ほどのちに、ジュリヤンからの手紙で彼の居所を知ったマチルドは、ブザンソンの彼の牢獄をおとない、そのままブザンソンに留まって、土地の勢力家であるフリレール副司教に嘆願するなど、ジュリヤンの助命工作に奔走する。レーナル夫人も、公判の陪審員の全員に彼の助命を請う嘆願書を送る。だが、発砲事件から２月後の公判でジュリヤンに死刑の判決が下される。翌朝、マチルドは彼に控訴するように哀願するが、彼はそれを拒む。下掲の箇所は、その１時間後に、マチルドに請われたレーナル夫人がジュリヤンに会いにきた場面である。

● テクスト（下巻436頁７行目～439頁９行目）

いつもと勝手の違う溜息が聞えた。目をあけると、レーナル夫人だった。

「ああ！　死ぬまえにもう一度会えたんですね。夢じゃないかしら？」

と叫んで、ジュリヤンは夫人の足もとに身を投げた。だが、すぐ我にかえって、　5

「許してください。あなたから見れば、わたしはただの人殺しです」

「あなた。……あたし、控訴なさるようにと思って、お願いにまいりましたの。あなたがそのおつもりでないことは知っていますけれど……」嗚咽で息がつまって、夫人はものがいえなかった。　10

「どうかわたしを許してください」
「ええ、許せとおっしゃるのなら」レーナル夫人は立ち上がって、ジュリヤンの腕に飛びこんだ。「すぐに死刑の判決に控訴なさってくださいな」
　ジュリヤンは夫人にキスの雨をふらせた。
「このふた月のあいだ、毎日会いに来てくれますか？」
「ええ、きっと。毎日、主人さえいけないといわなければ」
「じゃ、署名します！」とジュリヤンは叫んだ。「ほんとに、あなたは許してくださるんですって！　とても考えられない！」
　ジュリヤンは夫人を両腕にかき抱いた。夢中だった。夫人は軽い叫び声をたてた。
「なんでもないのよ。痛かっただけ」
「肩でしたね」と叫んで、ジュリヤンは涙にかきくれた。すこし身体をはなすと、夫人の手を火のようなキスでおおった。「ヴェリエールのお部屋で最後にお会いしたとき、こんなことになろうとは思いもよらなかったのに」
「あたしだって、あのとき、ラ・モールさんにあんなはずかしい手紙を書こうなんて、思いもよらないことでしたわ」
「わたしは、ずっとあなたを愛していたんですよ。あなたしか愛さなかったんです」
「ほんとう？」と、今度はレーナル夫人が感激して声をたてた。彼女はひざまずいているジュリヤンの上にもたれかかった。長いあいだ、ふたりは声もたてずに泣いた。
　ジュリヤンは、これまで一度もこんなひとときを味わったことはなかった。
　ずいぶん時間がたって、やっと口がきけるようになると、レーナル夫人がきいた。
「で、あのお若いミシュレ夫人ってかたは、いいえ、ラ・モールの

お嬢さまは？　だって、あたし、この奇妙な恋物語を本気にしかけているんですもの！」

「一見ほんとに思えるだけです。あのひとはわたしの妻だけど、恋人じゃないんです」

お互いに幾度となく相手の話を途中でさえぎったりしたすえに、なんとか、めいめいの知らないことを話し合うことができた。ラ・モール氏にあてた手紙は、レーナル夫人の告解師をしている若い神父が文句をつくり、夫人はただそれを写しただけだった。

「信仰の道のおかげで、あたし、とんでもないことをしてしまったわ！それでも、あの手紙のいちばんひどいところは、手加減して書いたつもりよ……」

ジュリヤンの感激とうれしそうな様子は、夫人をすこしも恨んでいないことを物語っていた。ジュリヤンはこれほど夢中で愛したことはなかった。

「でもあたし、信仰はもっていると思うの」と、レーナル夫人は話を続けた。「心から神さまを信じていますわ。でも、同時にたいへんな罪を犯したと思っています。思っているどころか、わかりきったことですわ。あなたにピストルを二発撃たれたのに、ひと目会ってしまうとすぐ……」そこでまた、ジュリヤンは、夫人がさからうのもかまわず、キスを浴びせた。

「待ってちょうだい、あたし、あなたとよくお話がしたいの。忘れないうちに。……ひと目会ってしまうと、自分のつとめはみんな忘れてしまって、あなたが恋しくて、いえ、恋しいって言葉じゃ弱すぎるくらいですわ。あなたに対して、ただ神さまにしかもってはいけないような気持を感じてしまうの。尊敬と愛情と服従が交った気持よ。……ほんとうに、あなたに対してどんな気持をもっているのか、自分でもわからないわ。もしあなたが、牢番を短刀で突きさせとおっしゃるなら、きっと考えているひまなんかないわ、すぐに罪

を犯してしまうわ。お別れする前に、どうしてそうなのか説明してね。あたし、自分の心をはっきり知りたいんですの。なぜって、ふた月すれば別れるんでしょう。……でも、ほんとに、あたしたち別れるのかしら」こういってレーナル夫人は微笑を浮べた。 70

「さっきの言葉を取り消します」と、ジュリヤンは立ち上がりながら叫んだ。「毒でも、刃物でも、ピストルでも、炭火のガスでも、とにかくどんなやりかたにしろ、あなたがご自分の生命を絶ったり傷つけたりしようとなさったら、わたしは死刑の宣告に控訴しませんから」 75

Ⅰ 『読み解く』第14章の概念装置

われわれが小説の言説の「流れ」を辿っていくとき、諸種の感動的な構造に遭遇する。そして、そのたびに鮮やかな印象を覚える。

例えば、小説文にはしばしば「遅延構造」が認められる。この構造を、語り手は読者の感動がひときわ増大するように用いる。ロザリを乗せた汽車の到着をジャンヌがプラットフォームで心待ちにしている場面では、その列車が10分ほど遅延する。それでジャンヌは焦慮に駆られるのだが、彼女に感情移入をしているわれわれ読者もまた少なからずもどかしさを感じる。そのために、列車の到着は、ヒロインとわれわれにとって正しく感動的な出来事に他ならなくなる。

これは、「読みの前傾姿勢」が、人の、小説をはじめとするあらゆる文章を読み解く際の基本だからである。読者は言説の先へ先へと視線を運んでいく。けれども、「遅延構造」が設けられているところでは、この前傾姿勢が前のめりになって、出来事の生起に寄せるわれわれの期待が増大する。汽車が到着したのに、ロザリの姿がなかなか認められないという結構もそうだ。ロザリは、何人かの客が降車したあとに漸く姿を見せる。

読者に疑問を抱かせたうえで、それに対する応えをことさらに先送りする。

そうすることによって特定の事象をひときわ印象的なものにする。けだし、「遅延構造」によって醸し出されるインパクトは多大である。

ところで、読者に疑いを抱かせるやり方は、もっと微妙な形を取ることもある。例えば、ジャンヌはロザリから「着物にくるまって見えない赤ん坊」を手渡されるが、すぐには「赤ん坊」に特段の注意を払わない。心が息子のポールの身の上を漂っているからだ。馬車に乗り込み暫くして、赤ん坊の体温が自分の身体に伝わってくる。そのときにはじめて、ジャンヌは「赤ん坊の顔の覆いを取りのけて」歓喜を露にする。けれども、赤ん坊との喜ばしいこの対面を予見する読者がほとんどいないように言説が仕組まれている。だから、これは「遅延構造」というよりもむしろ「伏線構造」だと見る必要がある。もっとも、所与の言説の切片が遅延として把握されるか、伏線として機能するかは、それぞれの読者の読解における老練さの度合いによって決まる。

「遅延構造」や「伏線構造」と正反対なのが「並列構造」である。ここにおいて語り手は、読みの前傾角度を極端に小さくして、それをほとんど直立状態にしてしまう。その結果として、われわれ読者の視線が言説の一定箇所に釘づけにされ、いきおいわれわれの注意がその文章箇所に集中する。

例えば、「心地よいほのかな暖かさが、生命のぬくもりが」のところでは、言説の流れが暫く停滞している。これらの２つの切片は、どちらかが削除されても、前後の文意が不分明になることはない。しかし、そうされてしまうと、この並列構造が読者の視線を釘づけにして、そのぶん読者の胸にここの箇所を強く印象づける効果が消散してしまう。小説文に特有なドラマチック性が薄れることになる。

最後に「反転構造」に触れておこう。すなわち、語り手が出し抜けに真新しい出来事へとわれわれ読者の眼を振り向ける叙述法である。こうすることによって、語り手は読者の関心を強く惹き止めておく。読者を驚かせることによって、その心の琴線に触れようとする。

例えば、赤ん坊の体温がジャンヌの身体に染み通ってきたときに、息子の身の上ばかりを思っていた彼女はにわかに我に返る。広々とした空間の描写

が直前になされたあとのことである。文字どおりに、ここでは視線の反転が起こっている。広い空間から膝のうえの赤ん坊へと、視線の向かう方向が突然に変わっている。

以上の「遅延構造」「伏線構造」「並列構造」「反転構造」は、いずれもが小説文をドラマチックにする点で共通している。文章の流れ方がいろいろに変えられ、そのつど読者は眼前の言説に魅了される。

Ⅱ　テクストの分析

本断章の出だしの２文は、遅延構造のうえに成り立っている。「いつもと勝手の違う溜息が聞えた。目をあけると、レーナル夫人だった」の箇所である。

ジュリヤンがレーナル夫人だと気づくに先立って、彼の聴覚上の不審の念と「目をあける」という彼の身体的変化に語り手は触れている。そのぶん、レーナル夫人だとのジュリヤンによる識別が先送りにされている。ここの言説は極めて短い。最小限な遅延構造のケースだと言えよう。

もっと息の長い遅延構造としては、「控訴」のテーマのそれが挙げられる。13～14行目の「すぐに死刑の判決に控訴なさってくださいな」とのレーナル夫人の要請に対して、ジュリヤンはすぐには返答しない。返答に先立って「ジュリヤンは夫人にキスの雨をふらせた」（15行目）とある。さらに、「このふた月のあいだ毎日会いに来てくれますか？」（16行目）との願望の言葉を、ジュリヤンはレーナル夫人に投げかける。それに夫人が首肯してはじめてジュリヤンは「じゃ、署名します！」（18行目）と応じる。ところが、夫人が自らの自殺をほのめかすに及んで、ジュリヤンはこう叫ぶ。

「さっきの言葉を取り消します」（71行目）

ここにおいて、決定的だと思われた先刻の控訴への同意を、ジュリヤンが再び取り下げる。

けだし、「控訴」に対するジュリヤンの諾否が揺らぐ場面をまえにして、わ

れわれ読者の気持は翻弄される。遅延が２つ連なっており、そのつどそれらの解決が先送りにされている。このような結構は、読者の心を揺さぶり、結末を知りたいとのわれわれの欲求を募らせる。登場人物の気持がどこに落ち着くのかに、われわれの注意が集中する。

ところで、前章の「テクスト」のなかで表れていたレーナル夫人の誣告の書簡に、多少なりとも奇異の念を抱いた読者は少なくないのではないか。ジュリヤンの人格が高潔で清廉であることを、われわれ読者は知っている。だから、この書簡は一つの重要な謎としてわれわれの胸に巣食い、遅延構造が構築される柱として機能する。

あるいは、読者によっては、ここの構造が伏線のそれとしてしか捕らえられないかもしれない。レーナル夫人の告発状と本断章とのあいだには60数頁の隔たりがあるので、そこから遅延効果を感じ取れる読者はむしろ少ないとも考えられる。もっとも、小説の「経済的組織性」に注意を怠らない読者であれば、長々と書き連ねられたレーナル夫人の誣告の手紙が、のちのストーリー・ラインに大きな影響を与えるはずだと認識したことだろう。そして、この告発状を脳裡に宿しつつ爾今のストーリー展開を追っていったであろう。あるいはまた、この手紙を認めたときの夫人の真意を暴く箇所がのちに表れることを予期したかもしれない。要は、個々の読み手がどれだけ老練な読解者であるかの問題に帰着する。

いずれにせよ、レーナル夫人の「裏面史」を本テクストは暴いており、われわれ読者は告発状が書かれた状況を知って一驚を喫する。夫人の言う「あんなにはずかしい手紙」（27～28行目）は、「夫人の告解師をしている若い神父が文句をつくり、夫人はただそれを写しただけだ」（45～46行目）とのことである。けだし、ジュリヤンの驚愕が思いやられる場面である。

この夫人の言葉において、「遅延」もしくは「伏線」の構造が完成される。教会における発砲事件が単なる誤解に基づいていたというアイロニーは、われわれ読者に多大な不条理感を抱かせる。もっとも、不条理な結末や結節は、往々にして小説において認められることである。例えば、アルベール・カ

ミュの『異邦人』が想起されよう。このカミュの小説は、不条理な殺人事件と笑止な公判の模様を描いている。

*

次の「並列構造」については、最も明瞭な例が、断章末のジュリヤンの言葉に表れている。

「さっきの言葉を取り消します」と、ジュリヤンは立ち上がりながら叫んだ。「毒でも、刃物でも、ピストルでも、炭火のガスでも、とにかくどんなやりかたにしろ、あなたがご自分の生命を絶ったり傷つけたりしようとなさったら、わたしは死刑の宣告に控訴しませんから」

レーナル夫人の「でも、ほんとに、あたしたち別れるのかしら」（69～70行目）との自殺をほのめかす言葉に、ジュリヤンがいきり立つ件である。「毒でも」「刃物でも」「ピストルでも」「炭火のガスでも」と、畳みかけるようにジュリヤンは憤怒を露にする。これらの４つの要素が並べ置かれているからこそ、ここから読者が受ける印象が深甚なものになる。１つの要素でも省かれると、われわれの感動の度合いが減殺するだろう。

さらに「あなたがご自分の生命を絶ったり傷つけたりしようとなさったら」では、２つの要素が並べ置かれている。「自分の生命を絶つ」「自分を傷つける」の２要素である。ここでも、並列構造から生まれるドラマチックな響きが醸し出されている。はたして、これらの要素の一方が削除されると、昂揚感が損なわれてしまうのは歴然としている。

そういうわけなので、ここの箇所からは、ジュリヤンの激昂ぶりが如実に窺われる。発話様態を表す「ジュリヤンは立ち上がりながら叫んだ」と、その前後の直接話法とが、絶妙な均衡を創り出している。

ところで、本断章の前半部分は、ジュリヤンとレーナル夫人の感激の模様を詳細に描いている。だから、それに触れる言葉が多くの箇所に鏤められている。「ジュリヤンは夫人の足もとに身を投げた」（５行目）、「嗚咽で息がつまって、夫人はものがいえなかった」（10行目）、「レーナル夫人は立ち上がって、ジュリヤンの腕に飛びこんだ」（12～13行目）、「ジュリヤンは夫人を両

腕にかき抱いた」（20行目）、「ジュリヤンは涙にかきくれた」（23行目）、「彼女はひざまずいているジュリヤンの上にもたれかかった。長いあいだ、ふたりは声もたてずに泣いた」（31～33行目）などである。

２人の愛の昂揚を喚起している限りにおいて、これらの言辞は互いに並列の関係を取り結んでいる。反復性が高いので、われわれ読者が受けるインパクトは絶大である。もっとも、ここの箇所は単なる反復ではない。これらの切片は集中的に言説上に現れている。ラフティングのゴムボートが次々に急流の大小の落差を下り行く映像さながらに、われわれは登場人物たちの情愛の発露に頻々と出遭う。そのたびに驚きの念に打たれる。この集中性が、ジュリヤンとレーナル夫人の恋愛関係の底知れないまでの深さを表象している。

見られるように、並列構造はしばしば情動の激烈さを表す。そこに読者の視線は釘づけにされ、われわれは登場人物たちの心中を克明に思い描く。登場人物たちの激情を彼らと分かち合う。

より対句的な並列構造としては、連続する次の２つの直接話法を指摘することができる。

「ヴェリエールのお部屋で最後にお会いしたとき、こんなことになろうとは思いもよらなかったのに」

「あたしだって、あのとき、ラ・モールさんにあんなはずかしい手紙を書こうなんて、思いもよらないことでしたわ」

（24～28行目）

ジュリヤンとレーナル夫人とは、ここにおいて言説的にも心理的にも全き同調関係にある。発話内容の類縁性と語彙用法の相似性が読者の感興をそそる。われわれ読み手の「前傾姿勢」は暫く「直立姿勢」に改められ、われわれの視線は当該箇所に釘づけにされる。こうした構造においては、読み手は登場人物たちに感情移入を行いつつ、彼らの心理に深々と浸る。彼らの内面と密な関係を取り結ぶ。

*

ここのテクストは、反転構造で始まっている。「いつもと勝手の違う溜息が聞えた」とあり、ジュリヤンの胸に不可思議の念が萌したことが表されている。そのあとに「目をあけると、レーナル夫人だった」と続くので、ジュリヤンは「溜息を聞く」まえは、居眠りをしていたか、瞑目しながら黙想していたかのいずれかだと推察される。いずれにしても、本断章のアタックは印象的である。主人公の予期していない事象が正に起ころうとしていることに、読者の注意が惹きつけられる。

また、20～23行目にはこうある。

ジュリヤンは夫人を両腕にかき抱いた。夢中だった。夫人は軽い叫び声をたてた。

「なんでもないのよ。痛かっただけ」

「肩でしたね」と叫んで、ジュリヤンは涙にかきくれた。

２人の愛情の流露というテーマが、当のジュリヤンによって負わせられた夫人の肩の傷というテーマによって遮られる件である。主題のこのような切り替えをまえにして、われわれ読者は驚かざるを得ない。男女の情愛に同化していたところに、肩の痛みという即物的な事象が入り込んできたことに、反転のニュアンスを強く感じ取る。けだし、レーナル夫人の傷の痛みは、本断章から読み手が受ける感動をひときわ大きくする重要なモチーフである。それが現れるからこそ、ジュリヤンとレーナル夫人の相互の愛情が趣深く綴られている。

さらに、本断章末からも反転のニュアンスが強く感じ取られる。

「[…] なぜって、ふた月すれば別れるんでしょう。……でも、ほんとに、あたしたち別れるのかしら」こういってレーナル夫人は微笑を浮べた。

「さっきの言葉を取り消します」と、ジュリヤンは立ち上がりながら叫んだ。「毒でも、刃物でも、ピストルでも、炭火のガスでも、とにかくどんなやりかたにしろ、あなたがご自分の生命を絶ったり傷つけたりしようとなさったら、わたしは死刑の宣告に控訴しませんから」

(68～75行目)

ここからは２つの反転構造が掬い出せる。

ジュリヤンが処刑されると同時に自分の生命を断つという自らの考えに対して、レーナル夫人が浮かべる「微笑」の件からは、多分に唐突さが感じ取られる。それまで夫人はジュリヤンに対する愛しさに夢中になっていた。そういう文脈にあって、ふと自分もジュリヤンと死をともにしようとの気持が、夫人の心中に湧き起こる。これは明白な反転構造であり、そこにおいてわれわれ読者は多かれ少なかれ意外の感に打たれる。

もう１つは、「さっきの言葉を取り消します」ではじまるジュリヤンの叫び声である。レーナル夫人の仄めかしの言葉を聞き、彼女の「微笑」を目にしたジュリヤンは、その自殺の気配を容赦なく撥ねつける。レーナル夫人の反転的な思考の流れを即座に堰き止める。これは、反転に対して反転で応じるドラマチックな構成である。

小説の読者は劇的言説を好む。それは小説の全体的構成についても言えることだし、個々の断章についても言えることだ。そんななかにあって、反転構造は最も効果的にドラマチック性を醸し出す。事態がどのように急変するのかに気を配りながら、人は小説文を読み進める。それは、数々の驚きを喫したいからである。接続詞「ところが」が表象するような逆接関係を、小説の読者は常に待ち望みながら、言説の流れを辿っていく。

Ⅲ　まとめ

われわれ読者が小説の初読の際に抱く感興は、本章で見てきた４つの構造を基にして湧き起こる。また、同じ小説を十数年も隔てて再読するならば、そのときもそうだと言える。小説は複雑で長い文章なので、時の流れとともにわれわれの脳裡で風化していくからである。ストーリー・ラインのうえのいろんな箇所が判然としなくなっていく。

また、長いあいだを隔てるにつれて、読者が数々の誤解を自らのうちに育んでしまうこともある。そして、再読や三読において、自分の「記憶」と実

際の小説文との食い違いに新鮮な驚きを喫する。詩文において見られるような暗誦は、小説文の場合には望むべくもない。

われわれが本章で行った分析は、そのような風化や劣化に抗うためのものであったと言えなくもない。４つの構造という観点からテクストを読み解くことによって、所与の断章を立体的な形で胸裏に刻み込もうとする営為である。いたずらに小説作品を「消費」するのではなく、断章を徹底的に分析することによって、できれば丸ごと半永久的にテクストを記憶に焼き付けようとする。そうしたほうが、心のスクリーンにいろんな場面を随時に映し出しやすい。断章凝視の主たる目的の一つは正にこの点にある。所与の断章を分析し尽くすことによって、その内容を脳裡に収めておけば、日常生活のなかでいつでもそれを反芻できる。良きにつけ悪しきにつけ、登場人物の心性を記憶の画面に蘇らせることができる。そうすることで生きる指針が得られるのは言うまでもない。

最後に、本章のテクストから『赤と黒』の結末に至るまでの梗概を記しておこう。

３日後にレーナル夫人は夫に呼びつけられてヴェリエールに帰るが、１週間後には夫の許を逃れてブザンソンに舞い戻り、毎日ジュリヤンの牢獄を訪れる。マチルドはそれに嫉妬するものの、ジュリヤンを益々恋しく思う。結局、控訴は棄却され、ジュリヤンは23歳で断頭台の露と消える。夫人は約束どおりに自殺はしなかったが、彼の死後３日目にこの世を去る。

おわりに

文学は「文章学」であるべきだとは、筆者の持論である。所与の言説に内在するいろんな側面を知り、その言説の特有性を明らかにする。そうすることを通じて、小説ならば小説の幾つもの件を胸中に刻み込んでいく。心を豊かにする。詩文に限らず小説文においても、「暗誦」を少なくとも志向することは重要である。

ところで、筆者が東京大学大学院の人文科学研究科仏語仏文学専門課程の院生であったときに、某教授は「理論をする人は文学作品をあまり読まない」と言い放った。そのときは「そんなものか」と聞き流していたが、いま思えば、その言葉には２つの謬見が含まれている。

１つは「理論をする人」に関する。これではまるで「理論をしない人」がいるかのようだ。文学も人文科学の１つである以上、その学徒は科学的な理論を追い求めるべきである。そうでなければ、単なるディレッタンティズムに陥ることになる。趣味で文学を楽しむ人は世に多いが、そのような人を文学研究者とは呼ばない。もっとも、文章学を実践するときは、冷徹な分析眼と文章の美点に愉悦する心性とを同時に持たねばならない。

２つ目は「文学作品を読む」に関する。その教授は「読む」という営為をどのように捕らえていたのであろうか。単なる好事家として作品を読むのであれば、それは文学研究の名に値しない。再読や三読をしつつ所与の言説を分析しなければ、文学を研究することにならない。文学鑑賞とは、言うは易く行うは難いことである。作品を通り一遍に読むだけでは、読後に残るものは無いに等しい。飽くまでも「文章学」の立場から文学作品に迫らなければならない所以である。

*

本稿では、『「女の一生」を読み解く――フランス小説の徹底分析――』において剔抉された概念装置の有効性を検証することを目指した。その検証はこの論考で十分に成し得た。はたして、『読み解く』の各章で抽出された概念装置に準拠しながら『赤と黒』の幾つものテクストを分析したところ、少なからず興味深い結果が得られた。

もっとも、『読み解く』の概念装置を文字どおりに適用するだけでは、埒が明かない断章も存在した。しかし、その場合でも、『読み解く』の概念装置が厳然とあったからこそ、そうした事象に気づくことができた。そうでなければ、そんな文章箇所があっても、何の痛痒を感じることなく読み飛ばしてしまっていたであろう。

例えば、本稿第１章の「テクストの分析」においては、ジュリヤンとレーナル夫人との邂逅が緩やかな筆致で描かれていることが見て取れた。『読み解く』第１章の「窓辺でのジャンヌの夢想」でも、叙述のスピードはかなり緩慢であったが、それと比較しても、２人の邂逅を描くこの場面の克明さは際立っている。語り手がそのぶんこのシーンを重要視している表れである。このように、登場人物の持続時間の短さが表現の微細さといかに緊密に通底しているかという点が、対応する２つのテクストを比べることによって如実に理解される。

あるいはまた、本稿第２章では、非話法的な箇所についての補正を行うことができた。そのような箇所においては、純然たる空間描写がなされるばかりではなく、登場人物の情動が極度に昂進する様子もまた描かれることを銘記できた。『読み解く』第２章の「テクスト」しか射程に入れなかったならば、理解できなかったことである。対応する２断章を比較することの効用がいかに大きいかに気づかされる。

このように見てくると、小説理論の検証は際限のない営為のように思える。別の小説のテクストを分析の俎上に載せれば、新たな発見が俟っていることだろう。けれども、そのような発見も、飽くまで『読み解く』の小説理論の延長線上に位置づけられる。理論の改良のためには、まずその「試作品」が必要である。その意味では、『読み解く』とこの「『赤と黒』の構造」で築かれた小説理論は、恰好な試作品だとわれわれは自負している。

*

筆者は、本学で公務員試験対策の「文章理解」という科目を担当している。その教材作成のために幾冊かの問題集を調べている最中に、爽やかな２つの文章に出遭った。本論考のエピローグとして、それらを掲げよう。前者は小林秀雄の、後者は篠田一士の文章だとのことである。いずれも、実務教育出版刊行の『上・中級公務員試験－教養分野別問題集－文章理解［2008年度版］』に掲載されている。

■ 歴史の秘密が、ぼくらの生活体験のただ中にあるように、古典が古典

である秘密は、ぼくらの日常の文学鑑賞という行為のうちにある。古典の成立条件を、当時の歴史環境のうちにどんなに精細に求め得たところで、ぼくらがその作品を古典と呼ぶゆえんのものを説明し得ないであろう。なぜかというと、古典とは、ぼくらにとってかつてあった作品ではない。ぼくらにある規範的な性質を提供している現に目の前にある作品である。古典はかつてあったがままの姿で生きながらえるのではない。日に新たな完璧性を現ずるのである。かつてあったがままの完璧性が、世の転変をよそにひとり永遠なのではない。新しく生まれ変わるのである。永年の風波に堪える堅牢な物体ではなく、汲み尽すことのできぬ泉だ。ぼくらはまさに現在の要求に従って過去の作品から汲むのであって、過去の要求に過去の作品がいかに応じたかを理解するのではない。現在の要求に従い、汲んでも汲み尽せぬところに古典たらしめる絶対的な性質があるのだ。

■ 文学の最大のアクチュアリティはつねに、伝統と前衛の衝突の瞬間にあり、文学の真の変容が実現されるのはこのときをおいて外にはない。こういう瞬間を見忘れた自称文学のなかにある自己とか、思想というものにどれほどの意味を与えることができるだろうか。

本来的にいえば、文学作品をすべて作者という特定の人間の自己表現とみなす考え方は正しいものとは思えない。たしかに作家は、「自己」あるいは自我とおぼしきものを胸に描いて作品を書きはじめる。しかし、作品が作品としての形をととのえ、体をなすにつれて、そこに出現する、だれのものでもない、まただれのものでもありうる言語的世界のなかに没入することによって、自我はより普遍的なものに変容するのである。

――完――

主要参考文献

— Berthelot (Francis): *Parole et dialogue dans le roman*, Nathan, 2001.
— Bourneuf (Roland) et Ouellet (Réal): *L'univers du roman*, PUF, 1975.
— Dubois (Jean) et al.: *Dictionnaire de linguistique*, Larousse, 1973.
— Fontanier (Pierre): *Les figures du discours*, Flammarion, 1977.
— Genette (Gérard): *Figures III*, Seuil, 1972.
— Stalloni (Yves): *Dictionnaire du roman*, Armand Colin, 2006.
— Todorov (Tzvetan): *Qu'est-ce que le structuralisme? 2. Poétique*, Seuil, 1968.
— Valéry (Paul): *Œuvres I*, Gallimard, 1957.
— Valéry (Paul) : *Œuvres II*, Gallimard, 1960.
— 川本皓嗣／小林康夫編『文学の方法』、東京大学出版会、1996年。
— 国廣哲彌『意味論の方法』、大修館書店、1982年。
— 小森陽一『出来事としての読むこと』、東京大学出版会、1996年。
— 資格試験研究会編『上・中級公務員試験－教養分野別問題集－文章理解〔2008年度版〕』、実務教育出版、2006年。
— 野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、1998年。
— 野内良三『レトリックと認識』、日本放送出版会、2000年。
— 吉田廣「二つの『石榴』——日仏詩文の比較対照的分析の一例——」、大阪経済法科大学論集第55号、1994年。
— 吉田廣「小説文の『迸る時間』」、大阪経済法科大学論集第91号、2006年。
— 吉田廣『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』、大阪経済法科大学出版部、2008年。
— 吉田廣「小説文の統合性——『雁』をめぐって——」、大阪経済法科大学論集第98号、2009年。
— 吉田廣「『赤と黒』の構造（一）」、大阪経済法科大学論集第101号、2011年。
— 吉田廣「『赤と黒』の構造（二）」、大阪経済法科大学論集第103号、2012年。
— 吉田廣「『赤と黒』の構造（三）」、大阪経済法科大学論集第105号、2014年。